

「犬身」



犬身（上巻）朝日文庫 337頁
著者/松浦理英子
朝日新聞出版 ¥651
発行/2010年9月
ISBN/ 9784022645647

犬身（下巻）朝日文庫 294頁
著者/松浦理英子
朝日新聞出版 ¥630
発行/2010年9月
ISBN/9784022645654



2010年の読売文学賞を受賞した上下2巻の長編小説です。ジャンルのには動物小説とは言い難いですが、これだけ犬絡みの固有名詞が登場する小説も珍しいのではないのでしょうか。

主人公の八束房恵は狗児市に住み、「犬の目」というタウン誌の制作に関わり、マンションからは犬啼山が見え、狗児市に隣接して御手市、穴掘市があるという具合です。

自転車での散歩コースは、犬洗いの土手沿いで、犬渡橋と犬尻橋の間にはカウンターバーの「天狼」があり、マスターは赤尾猷、天狼の前で偶然に再会するのが、以前に取材したことがある女性陶芸家の玉石梓。物語はこの3人を中心に展開して行きます。

房恵は「この世で犬ほど好きなものはなかった。もっともらしい理由はない、犬は優しい、犬は清い、と感じる資質が生まれつき自分に備わっているのだとしか思えない。」と感じていました。それが昂じていつしか自分が犬になりたいという「犬化願望」が生まれ、体は人間、魂は犬という「種同一性障害」という病

気を思いつくまでになりません。そして玉石梓との再会の時、彼女と愛犬ナツとの交流を真近に見て、「玉石梓の犬になりたい」という思いが湧き上がったのです。バー天狼で梓を待つ房恵「房恵の尾氈骨はまるでその先が尻尾となっているかのように激しく震えたので、房恵は今の瞬間自分の体は大になっていったのではないかと思っただけだった。

・中略・

ついに梓が姿を現すと、飛び上がったスツールから転げ落ち、しかしちぎれそうに尻尾を振り回しながら梓に飛びついて行く、という一繋がり映像だった。房恵の胸は甘い気持ちでいっぱいになった。「天狼のマスター朱尾は房恵に魂売買契約を持ちかけ、房恵の変身願望を叶える事と房恵の魂との交換を迫ります。契約を結んだ房恵は愛らしい犬に姿を変え、ナツを亡くしていた梓の元へすんなりと迎え入れられます。

この辺までは空想小説として読めたものが、梓の兄の「彬」とその家族が登場人物に加わるに及んで「家政婦は見た！」的大衆小説になり、犬となったフサの目の前で赤裸々に繰り広げられる梓と彬の性行為が描写されるに及んで、官能小説の色合いが出て来たところで、下巻に続く...